

「Birger Gerhardsson による口述伝承研究」 についての考察

大 宮 謙

1. はじめに

初期キリスト教伝承の伝達過程の研究史において、異彩を放っている研究者の一人が、ここに取り上げる Birger Gerhardsson である¹。Gerhardsson は、Rudolf Bultmann を始めとする様式史批判が共観福音書の伝承史研究の主流であった時代に、真っ向から異説を唱えた骨太の研究者である。日本では必ずしも十分に知られておらず、欧米の研究者による Gerhardsson の学説の要約を参照する程度であるように思われる。しかも、欧米の研究者の中にも、一面的な理解が少なからず見受けられる。こうした中で、本論では、Gerhardsson による口述伝承研究の全体像を明らかにした上で、いくばくかの考察を加えたい。

2. Birger Gerhardsson の研究の特質

Birger Gerhardsson は、1961年に自身の博士論文である『記憶と写本 ラビ的ユダヤ教と初期キリスト教における口述伝承と文書伝達』を刊行した²。本

1 Birger Gerhardsson については、2017 年度の研究期間中に研究の機会を得た。なお、この研究期間に考察した他の研究者の一人については、拙論「『Kenneth Bailey による福音書の口述伝承に関する研究』についての考察」、青山学院大学宗教主任研究叢書紀要『キリスト教と文化』(33)、91-115 頁を参照。なお Bailey も Gerhardsson の口述伝承理解を、三つの類型の一つに位置付けている。

2 Birger Gerhardsson, *Memory & Manuscript: Oral Tradition and Written Transmission in Rabbinic Judaism and Early Christianity*, Lund, C.W.K. Gleerup, 1961 (ただし参照

書において彼は「技術的観点」を中心に詳細な分析を行った。ここで「技術的観点」とは、伝承の伝達過程そのものの具体的考察に主眼を置くことを指している³。従って、伝承内容の考察は、必ずしもここでの主たる目的では無い。別言すれば伝承の内容（What）よりも方法（How）を Gerhardsson は主たる考察対象にするのである⁴。

こうした観点から、第一段階としてラビ的ユダヤ教における伝達方法を分析した上で⁵、その結果に基づいて、Gerhardsson は第二段階として、初期キリスト教における伝達過程について、様式史批判研究とは異なるアプローチを提示する⁶。すなわちそれは、「イエスと初代教会によって使用された教えること、

したのは Birger Gerhardsson, *Tradition & Transmission in Early Christianity*, Lund, C.W.K. Gleerup, 1964 との合本である Birger Gerhardsson, *Memory & Manuscript: Oral Tradition and Written Transmission in Rabbinic Judaism and Early Christianity with Tradition & Transmission in Early Christianity*, Grand Rapids, Eerdmans, 1998 である）。

- 3 Birger Gerhardsson, *The Reliability of the Gospel Tradition*, Grand Rapids, Baker Academic, 2001, p. 23 では「イエス伝承の初期キリスト教における伝達の Sitz im Leben は伝達そのもの、すなわち自覚的、技術的教えるの行為としての伝達にある」と述べている。
- 4 一方、自ら Gerhardsson, op. cit. (1961) の補遺と位置付ける Gerhardsson, op. cit. (1964), p. 8（位置付けについては Ibid., p.10 参照）では「初代教会の伝達技術の研究は、それ自身が目的ではなく、可能であれば更なる課題のための基礎、すなわち我々が得ている福音書素材の起源と最初の歴史を決定するための基礎を提供するために遂行される」と述べている。
- 5 第一段階の分析対象をラビ的ユダヤ教に絞る理由について Gerhardsson, op. cit. (1998), p.x は、「イエスと初代教会が活動したヘレニズム時代のユダヤ文化という環境で、伝達方法について十分に広範で、一貫し、明瞭な情景を得られた唯一のものだったから」、また「ほぼ同期間の他のユダヤ教派の保存された素材は断片的で数も少なく、ユダヤ教以外の古代ギリシア・ローマの素材も限定的な助けにしかない」と述べている。また Gerhardsson, op. cit. (1964), p. 7 では「歴史的な過程の具体的な枠組みの考察から始める。福音書伝承が形作られる文脈における教えること、伝達すること、これらの慣習、方法、主要な特徴を理解することを試みる」と述べている。Gerhardsson, op. cit. (2001), p.71 も参照。
- 6 ここで Gerhardsson が試みているのは、一方はユダヤ教、他方は初期キリスト教、両者の伝承の伝達過程を可能な限り近い時代で対比させることである。従って、かけ離れた時代の両者を強引に対比させようとしている訳ではない。ところが Gerhardsson, op. cit.

伝達すること、これらの技術の具体的な歴史的状況、別言すれば彼らの『教授法 pedagogics』を得ようとする⁷こと⁸である⁸。彼がこの取り組みを始めた理由は、「福音書研究が40年間に渡って共観福音書伝承の起源と保存について説明

(1998), p.xiii-xiv に拠れば、Gerhardsson, op. cit. (1961) は高名な批評家、中でも Morton Smith により、誤解を招く仕方であって要約され、完全に切り捨てられた (Morton Smith, "A Comparison of Early Christian and Early Rabbinic Tradition," *JBL* 82, 1963, pp.169-76)。しかもこの歪曲と Smith の短絡的な反論を一層単純化して、原著を読んでいないであろう無数の批評家が繰り返した。すなわち、Gerhardsson の取り組みは、およそ紀元 200 年のラビの発展した伝達技術を紀元 70 年以前に単純に遡って読み込もうとしており、またラビの学問的方法を初期キリスト教の一般の教師に押し付けていると誤解され、時代錯誤で不適当だと断じられた。しかし、これは正確な理解ではないと Gerhardsson は抗議している。Rafael Rodríguez, *Oral Tradition and the New Testament A Guide for the Perplexed*, London, Bloomsbury, 2014, p.34 に拠れば、その影響で Gerhardsson, op. cit. (1961) は、少なくとも 20 年は学問的評価を受けることがなかった。しかし、Werner H. Kelber, *The Oral and the Written Gospel: The Hermeneutics of Speaking and Writing in the Synoptic Tradition, Mark, Paul, and Q*, Philadelphia, Fortress Press, 1983, p.1-34 (ただし参照したのは Walter J. Ong の序言の加わった新版、Bloomington, Indiana University Press, 1997) が Gerhardsson, op. cit. (1961) を Bultmann の伝達モデルに対する体系的な別の選択肢の提供を試みたものとして大きく取り上げたこともあり、ようやく Gerhardsson, op. cit. (1964) との合本で Gerhardsson, op. cit. (1961) は 1998 年に再版された。Rodríguez, op. cit. p.34 は Gerhardsson を評して、「今日では、時代よりも文字通り数十年先を行く、初期キリスト教の口述伝承の研究史における独創的人物として認められている」と述べている。なお合本 Gerhardsson, op. cit. (1998) の「はしがき」(pp.xxv-xlvi、特に pp.xxv-xxix) では、Morton Smith のかつての弟子 Jacob Neusner が、Gerhardsson を正当に評価しなかった師を相当辛辣に批判し、自身もそれに組みしたことを真摯に謝罪している。なお Gerhardsson, op. cit. (1961), p.30 に拠れば、同書でのユダヤ教に関する考察はタンナイーム時代 (すなわちおよそ紀元 10 年以降) とアモライーム時代 (紀元 200-500 年) に集中している。リチャード・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち 目撃者証言としての福音書』新教出版社、2011 年、243 頁も Gerhardsson の方法論に関して「(新約聖書とはやや時代的ギャップがあるにせよ) ラビ・ユダヤ教に見られる口述伝承の方法は、ラビ・ユダヤ教伝統独特のものではなく、古代世界の教育法において、そして初等教育レベルでさえも、一般的に用いられていたものである。」と述べている。

7 Gerhardsson, op. cit. (1964), p.11.

8 Gerhardsson, op. cit. (2001), p.xiii の序文において Donald Hagner は、「Gerhardsson の著作の大きな長所の一つは、諸福音書が書かれた歴史的な文脈に我々を引き戻す点にある」と述べている。

しようとしてきたものの⁹、いまだ共観福音書伝承の担い手たちが、技術的に言って（下線は論者による）、どのように自分たちの伝承を伝達することに知り掛かったのかの具体的な状況を提供することに貢献したものは一つとしてなかった」からである¹⁰。

3. ラビ的ユダヤ教における伝承の伝達過程

第一段階、別言すれば初期キリスト教における伝達過程を考察するための準

-
- 9 Gerhardsson, op. cit. (1961) から逆算すれば、「40 年間の取り組み」とは、およそ 1921 年からの取り組みのことを指すことになるが、同年は Martin Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, Tübingen, Mohr Siebeck, 1919; K. L. Schmidt, *Der Rahmen der Geschichte Jesu. Literarkritische Untersuchungen zur ältesten Jesusüberlieferung*, Berlin, Trowitzsch & Sohn, 1919 に続き、ブルトマン『共観福音書伝承史』原著が出版された年に当たる。従って、Gerhardsson は一連の様式史批判研究を念頭に置いていたと思われる。
- 10 Gerhardsson, op. cit. (1998), pp.ix-x. Gerhardsson, op. cit. (1961), p.14「様式史批判研究の開拓者たちは、分散的な伝承概念を扱っており、初期キリスト教福音書伝承が技術的にどのように伝達されたかについて曖昧なほのめかししか述べていない」、「Bultmann は我々に純粹に技術的な観点から福音書伝承がどのように伝達されたかと彼が考えているのかについて、いかなる具体的な情景をも述べ損なっている」。さらに Gerhardsson, op. cit. (2001), p.2「様式史批判学者への反論の主たるものは、彼らの著作が十分には歴史的でないこと」であり、「彼らは福音書伝承の起源という問いを、新約時代にパレスチナとその他の場所のユダヤ的環境の中でいかに聖であり権威ある伝承が伝達されたのかに関する問いという枠組みの中に投錨することに十分な精力を示さなかった」をも参照。関連して、もう一人の代表的な様式史家 Dibelius について Eric Eve, *Behind the Gospels: Understanding the Oral Tradition*, Minneapolis, Fortress Press, 2014, p.33 は、「パウロが伝承を受け渡す際の専門用語を使い、時に定型様式を引用していることに注目し、ラビ的ユダヤ教の類比を簡略にはのめかしているものの、自分の匿名の共同体伝承という概念に対してはこれらの点から影響を受けなかった」と述べている。Kenneth E. Bailey, "Middle Eastern Oral Tradition and the Synoptic Gospels", *The Expository Times* 106, p.363 も、「C. H. Dodd, J. D. G. Dunn, M. Hengel, J. Jeremias その他の学者たちは、これら両方の見方（論者註：Bultman と Gerhardsson）の間の何処かに実用的な立場を打ち出した。しかしながら、公式ラビ伝承（論者註：Gerhardsson が提示）のほかに中東の環境で口述伝承が実際にどのように機能するのかの具体的な証拠は、集められず、議論されなかった」と述べている。

備段階として、Gerhardsson は、ラビ的ユダヤ教における伝承の伝達過程を考察する。ここで、Gerhardsson は「キリスト教時代開始前後数世紀のユダヤ教の敬虔はトーラー中心主義と性格付けられる」¹¹という理解に基づき、主な考察対象をトーラーに絞っている¹²。また考察の際には、先に文書トーラーの伝達過程について分析し、続いて口述トーラーの伝達過程を分析している¹³。

3.1 文書トーラーの伝達過程

文書トーラーについては、Gerhardsson は次の三つの場面を伝達過程として挙げている¹⁴。第一の場面は、テキスト自体の保存を目的として、文書トーラーを専門家である写本家が注意深く写し取るものである¹⁵。第二の場面は、教育活動の場面であり、文書トーラーに関しては、初歩的な指導をする *bet sefer*¹⁶と呼ばれる学校で教えられ、テキストは暗記することが求められた¹⁷。

11 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.19.

12 ここで *Ibid.*, p.21 は、「最も広義には、トーラーという語は権威ある聖なる伝承全体——聖書に編纂されたものだけでなく聖伝として口述されたものをも含む——を集合的に指示する」と述べている。従って、文書トーラーと口述トーラーの両者を Gerhardsson は考察の対象に含めていると解せよう。

13 *Ibid.*, pp.27-29 では「文書トーラーを学ぶことミクラーは『読む』、口述トーラーを学ぶことミシュナーは『繰り返す』という意味の語が当てられている」ことが、文書トーラーと口述トーラーの区別があった証拠として提示されている一方で、両者の区別が単純では全くないことにも注意が促されている。また、*Ibid.*, p.30 では、両者のうち口述トーラーこそが自分たちの主要な関心であると断っている。確かに、分量的に言っても、文書トーラーの論述に第二章から第五章まで 38 頁が割かれているのに対して、口述トーラーの論述には第六章から第十二章まで 119 頁が割かれている。

14 *Ibid.*, p.42。また、この三つの場面はさらに *Ibid.* 第三章、第四章、第五章で一つずつ取り上げられている。さらに Gerhardsson, op. cit. (2001), p.70 をも参照。

15 Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.42-43 は、「公の礼拝、教育、裁判などに使用するためにテキストを写す責任を負ったのは、素人でなく専門家であった」と述べている。また、Gerhardsson, op. cit. (2001), p.70 では、「究極的に最も重要な文脈」として専門家によるテキスト保存を挙げている。

16 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.57, p.79。なお *Ibid.*, p.62 に拠れば、*bet sefer* では 5-7 歳で学び始め、最初に教えられるのはレビ記であった。一方、口述トーラーは、より進歩した研究をする *bet hammidrash* と呼ばれる学校で教えられた。*Ibid.*, p.75 参照。

第三の場面は公の礼拝での聖書朗読である¹⁸。

3.2 口述トーラーの伝達過程

口述トーラーについては、全般的な理解として、紀元70年や135年の破局がラビの見方と行動にある変化をもたらしたと認識しつつも、ラビ・アキバ（50-135年ごろ）に先じる時代でも、技術的に言って（下線は論者）以後の時代と類似の仕方で口述伝承が伝達され¹⁹、学ばれたと Gerhardsson は想定しているように思われる²⁰。すなわちそれは、絶え間ない忠実な反復によって生きた

-
- 17 *Ibid.*, p.63. *Ibid.*, p.86 は「*bet sefer* ではいかなる実際の解釈も行われなかったと思われる」と述べている。また Gerhardsson, op. cit. (2001), p.71 は、「生徒がテキストを暗記してこそ、それは『聞いた』でなく『受け取った』と言い得る」と述べている。
- 18 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.67 に拠れば、ここでの考察の対象は、シナゴグの礼拝での聖書朗読に限定されているが、それは「技術的に言って神殿での聖書朗読と異ならない」という彼の判断に基づいている。こうした聖書朗読は長く礼拝の固定的な要素であったことから、テキストの保存を明らかに促したと見られている。*Ibid.*, p.68, p.70 参照。
- 19 Gerhardsson, op. cit. (1998), p.xii には、ラビの伝達技術として、記憶、「まず記憶し、それから理解する」という原理、簡潔さ、素材の短く意味深長なテキストへの短縮、詩的技巧、リズム、朗誦、記憶を助ける技法、メモの使用、勤勉な繰り返し、が挙げられている。さらに、Gerhardsson, op. cit. (2001), p.72 は、「記憶を助けるラビの技法のいくつかは、非常に古いものである」と述べている。Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.148-56 をも参照。
- 20 *Ibid.*, pp.77-78. *Ibid.*, p.111 も「アキバ以前の伝達が、後に観察されるものと全く異なる原理に従って起こったことは極めて有り得そうにない」と述べている。さらに Gerhardsson, op. cit. (1964), p.18 は、「暗記は教育改革者によって急に導入された新しい技術でなく、古代の教育原理であり…アキバと彼の訓練を受けた弟子たちが導入したものが何であれそれは暗記することではなかった」と述べている。Gerhardsson, op. cit. (1998), pp.xii-xiii; Gerhardsson, op. cit. (2001), p.xix; *Ibid.*, pp.12-13, p.72 をも参照。他方、「時代錯誤」という Gerhardsson への批判が全く論外なのではないという理解から、Eve, op. cit. (2014), p.39 は「文書と口述に対する態度には70年の神殿崩壊後に重大な変化があったと思われる」と述べた上で、註23で「70年以前のクムラン宗団には口述と文書との区別についての関心が無かった」とする S. Talmon, “Oral Tradition and Written Transmission, or the Heard and the Seen Word in Judaism of the Second Temple Period”, *Jesus and the Oral Gospel Tradition* edited by Henry Wansbrough, London, T&T Clark, 1991, pp.121-158 の説を例示している。さらに Eve, op. cit.(2014), p.40 は Martin S. Jaffee, *Torah in the Mouth: Writing and Oral Tradition in*

記憶として伝承を保持する仕方を中心とする²¹。ただ実際の伝達に関しては必ずしも内容が固定的とは限らず、その伝達は「基本的な固定性と補足的な流動性との間の複雑な相互作用」²²であり、「テキストは解釈され、改変され、修正される」²³ことがあると Gerhardsson は認めている²⁴。さらに、ある教師の言葉を保存する際には、簡潔さと短さが重要であると指摘されている²⁵。Gerhardsson に拠れば、その際、言葉を簡潔に縮約 (condense) する責務を負うのは教師自身であり、もし教師自身による縮約が不充分である場合には、後代の教師や生徒によって伝達過程においてそれが縮約される可能性があった、という²⁶。

3.3 口述トーラーの起源

さて、Gerhardsson はラビ的ユダヤ教における伝達方法の分析を終えるに当たり、「口述トーラーの起源」について、「A. ことば伝承」と「B. 物語伝承」

Palestinian Judaism, 200BCE-400CE, Oxford, Oxford University Press, 2001 が「純粹に口述の伝達過程は決してなかった。ラビ資料の伝達は、口述パフォーマンスと文書テキストの継続的相互作用がいつも含まれていた」と論じていることを引き合いに出している。本論 註 31 をも参照。

21 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.81. *Ibid.*, p.119 は「教義的な陳述は受け手がテキストを暗記するまで数回反復して受け渡された」と述べる。また *Ibid.*, p.133 は「生徒は自分の教師の正確な言葉を保持する義務がある。しかし教師も正確な言葉が保存されているかどうか確かめる責任がある」と述べる。さらに *Ibid.*, p.168 註 7 はトーラーの言葉を記憶に保持するために常に繰り返すべきことを記す聖書テキストとして、ヨシユア記 1:8、詩編 1:2 を挙げる。

22 *Ibid.*, p.93.

23 *Ibid.*, p.98.

24 Gerhardsson, op. cit. (2001), p.129 をも参照。他方「ヘレニズム化された西方では相当期間に渡り行われた他人の陳述の自分自身の言葉での言い換えや抽象化は、古代イスラルでは行われ」ず、「ある人の言葉は、その人自身の言葉で伝えられ」るのであり、「このことはラビ的ユダヤ教にも当てはまるが、ある進展や変化は生じた」との指摘もある。Gerhardsson, op. cit. (1961), p.30 参照。さらに、ボウカム、前掲書、242 頁をも参照。

25 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.136.

26 *Ibid.*, p.142. *Ibid.*, pp.142-43 には、後代の縮約が為された場合には、確かに簡潔さは得られるものの真正性は損なわれることが指摘されている。真正な言葉の改変が起こるからである。

に分けて述べている²⁷。

まず「ことば伝承」では、伝承として保存する「ことば」を選ぶ主体として、

1. 教師自身
2. 教師自身の個人的生徒
3. のちの時代の教師や生徒

の三者を挙げる。

一方、「物語伝承」の方では、伝承として保存する「物語」を選ぶ主体として、

1. 教師自身（数としては少ないと Gerhardsson は想定）
2. 生徒集団に属する者

の二者を挙げる。

また、Gerhardsson が、生徒の課題として「聞くことだけでなく、見ることもあり…生徒は自分の教師のことばについての証人であり、その行動の証人でもある」²⁸と述べているのは重要な指摘であろう²⁹。さらに Gerhardsson は、こうして集められた証言の「価値は——ラビにとっては——それらの歴史性に全く依存する」と述べている³⁰。

4. 初期キリスト教における伝承の伝達過程

次に、第二段階として、Gerhardsson は初期キリスト教における伝承の伝達過程を考察する。ここで Gerhardsson が分析の前提としているのは、弟子集団の主たるメンタリティが、ファリサイ派と共通して、口述トラーを文書でなく口述で伝達することを重視するというものであり³¹、従ってイエス伝承に

27 *Ibid.*, pp.171-89.

28 *Ibid.*, p.183.

29 逆を言えば、「教師たちは言葉においてだけでなく、行為においても教えることを望んだ」のである。*Ibid.*, p.185 参照。

30 *Ibid.*, p.183.

31 一方で、興味深いことに、エレミヤ書 36 章（特に 36:4,6,8,17-18,32）に見られる「口述に従って、言葉を書き記し、神殿に集まった人々に聞かせる」という「技術的観点」か

についても口述トラーと同等の扱いとして³²、口述で伝達すること³³が重視されたとする理解である³⁴。もっとも文書の類が全く使用されなかった訳ではない。Gerhardsson に拠れば、ユダヤ教のラビの生徒が私的なノートを持つように教会内でもイエス伝承の一部を同様に書き留め始めた、という³⁵。

らの描写については、当該箇所が Gerhardsson, op. cit. (1961), p.50 において「写本家が捕囚後のユダヤ教の中心であるエルサレム神殿と結び付けられていた」事例としてのみ取り扱われていて、伝達過程に関する描写としては言及されていない。しかし、このエレミヤ書の記述は、明らかに私的ノートとは異なる公的な性質を持つ文書に言及しており、十分な検討が必要であろう。

- 32 *Ibid.*, p.334 には「イエス伝承は口述トラーに高度に同義である (higher equivalent)」と述べられている。この点に関しては、果たして「イエス伝承」を「口述トラー」と同等に扱うことが適切かどうか、検討の必要があろう。
- 33 Gerhardsson, op. cit. (1964), p.37 は、口述伝達過程の主要な三つの機能として、1) 創作機能（伝承が創作され、成長し、実り豊かな変更を通して受け渡される）、2) 純粋な保存機能（伝承が肯定的にも否定的にも変更されずに保存される）、3) 消去機能（偶発的であれ意図的であれ伝承が抜け落ち、無くなる）を挙げている。また伝承が抜け落ちる事例として、*Ibid.*, pp.37-38 は、集団的な大惨事（紀元 70 年にエルサレムの律法学者たちが実質的に一掃されたこと）と共に、個人的な悲劇（個々の伝承の担い手の死）を挙げている。
- 34 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.202 に拠れば、「〔初期の〕数十年間に渡ってキリストに関する伝承は口述されたという事実を理解することが必要である」。こう理解すべき背景として *Ibid.*, p.201 は、次の二つのことを挙げている。すなわち、一つにはイエスの弟子たちの大多数が学識あるファリサイ派の人々を教師や霊的指導者と見ているユダヤ教主流の出身であるという多数の証拠があること、もう一つにはファリサイ派のユダヤ教は、文書トラーと口述トラーの区別を強調し、口述トラーを文書で伝達すること、このような素材の写しを公式文書と見なすこと、これらに反対したことである。Gerhardsson, op. cit. (1964), p.23 も「初期キリスト教運動は、ファリサイ派の教師が大きな権威と大きな影響を行使した領域で生じたと思われる」と述べている。さらに福音書に関しても、Gerhardsson, op. cit. (1961), p.202 には「二世紀半ばまでには四福音書は聖書として引用されるのが自然になったが、それ以前は諸福音書は聖書というよりも聖なる伝承であり、主に口述で役割を果たした」と述べられている。*Ibid.*, p.200 「教会の最初の時期の間には、諸福音書は疑問無しに『聖書』と見なされていたのではなく、むしろ『聖なる言葉』ないし口述の（メシア的）トラーと見なされていたように思われる」をも参照。
- 35 *Ibid.*, p.202. ボウカム、前掲書、244 頁には、この点に関する他の研究者の誤解も指摘されている。

もし、このようにイエス伝承について口述での伝達が重視されたと理解し得るならば、「初期キリスト教における伝承の伝達過程の分析」の課題は、「いかにして純粋に技術的観点から福音書伝承が口述で伝達される方法についての具体的なイメージを提案できるか」となろう³⁶。

4.1 2世紀の教会での二つの具体例

この課題に取り組むためにまず Gerhardsson が引き合いに出したのは、2世紀の教会での二つの具体例である。一つはエイレナイオスの言葉³⁷、もう一つはパピアスの言葉であり、いずれもエウセビオスによる引用である³⁸。

4.1.1 エイレナイオスの言葉

これはエイレナイオス自身が語った子ども時代の経験をエウセビオスが引用したものである³⁹。このエイレナイオスの言葉に関して Gerhardsson は二つの点に注目する⁴⁰。一つは伝承が権威ある語り手、すなわちポリュカルボスと関連付けられていることであり⁴¹、もう一つはエイレナイオスが伝承を暗記したと主張していることである⁴²。

36 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.202.

37 *Ibid.*, p.204. エウセビオス『教会史』第V巻(20)。本論では Gerhardsson による引用を翻訳。邦訳についてはボウカム、前掲書、289-290 頁をも参照。

38 Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.205-06. エウセビオス『教会史』第III巻(39)。本論では Gerhardsson による引用を翻訳。邦訳についてはボウカム、前掲書、288 頁をも参照。

39 日本語版は、エウセビオス、秦 剛平訳、『教会史』(上)、講談社学術文庫、2010 年、337-38 頁参照。

40 Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.204-05.

41 すなわち、ポリュカルボスが「ヨハネや主を見た他の人々との交流をどのように語ったのか、彼らの言葉をどのように記憶したのか、主について、彼の奇跡について、彼の教えについて彼らから何を聞いたのか、また、命の言葉の目撃者たちからこのことを受け取った者としてポリュカルボスが聖書に従って全てを繰り返したこと」が述べられている。

42 エイレナイオスがポリュカルボスから聞いたことを「紙にではなく自分の心に写し取り、常にそのままの形 (genuine form) で繰り返した」と述べている。

4.1.2 パピアスの言葉⁴³

一方、パピアスの言葉を Gerhardsson は、信頼でき知識の豊富な代弁者 spokesmen からどのように教師が意見を聞き、伝承を集めるかについての興味深い事例として読み取っている⁴⁴。ここでは「信仰のために主によって与えられ、真理そのものに由来する戒め」を語る者たちへのパピアスの崇敬の念が言い表わされ、また「(弟子として)長老たちに同行した誰かが来た時にはいつでも、私(パピウス)は長老たちの言葉を調べるのが常であった」と述べられている⁴⁵。さらに、「原則として書かれた言葉には、生きて留まり続ける(人間の)声に由来する言葉ほどには頼らない」ともパピウスは述べており、この言葉を根拠として、だからこそパピウスは伝承を書き留めずに、注意深く学んで自分の記憶に刻んだのだと Gerhardsson は解している⁴⁶。

4.2 ルカの証言(特に使徒言行録)とパウロの証拠

さて、2世紀の教会での二つの具体例に続いて、Gerhardsson が引き合いに出したのは、ルカの証言(特に使徒言行録)とパウロの証拠である。

4.2.1 ルカの証言(特に使徒言行録)

ルカの証言に関する Gerhardsson の指摘の中で重要と思われることは以下のことである⁴⁷。

43 日本語版はエウセビオス、前掲書、209-10 頁参照。

44 Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.205-06.

45 すなわち、アンデレは何と言ったか、ペトロは、フィリポは、トマスは、ヤコブは、ヨハネは、マタイは、という具合である。

46 一方、ボウカム、前掲書、32-42 頁は「生きて留まり続ける(人間の)声」に関して別の解釈を示しており、しばしばパピウスが「書物一般よりも口述伝承一般を重視した」と誤解されるが、実は『「生ける声」は口述伝承ではなく、教師の生の声であり、「パピウスが文書よりも重要と考えたのは口述伝承ではなく、歴史的出来事へ直接関与した人物とのはっきりとした個人的なつながりである。』と述べている。

47 ここで取り上げたものの他、初期キリスト教の裁判における判決文が、「主の言葉」とも「主から受けた」とも「イエスの名による宣言」とも言われずに、「聖霊と私たちが

第一には、使徒言行録の描く使徒像は「キリストの言動、また彼に関することと全て、特に復活についての証言を担った証人」であるとの指摘である⁴⁸。この理解は、十二使徒の資格に関する次の二要件からの帰結である⁴⁹。すなわち、「ヨハネの洗礼から主イエスが自分たちを離れて上に受け入れられた日まで主イエスが自分たちの間を行き来していた間いつも一緒にいたこと」と「イエスとその復活に関して証言するために特別に選ばれ、委任されたこと」である。

第二には、使徒の活動で最も重要なものの一つが、用語の使用頻度から判断して「福音を宣べ伝えること」よりも「教え、イエス・キリストについて証しすること」であるという指摘である⁵⁰。また別の個所でも、使徒たちが「祈りと御言葉への奉仕 *διακονία τοῦ λόγου* に専念するために他の仕事から解放された」ことが指摘されている⁵¹。さらに Gerhardsson は、「ルカは十二使徒を巡回して旅行し、使信を宣言する使者としては提示していない。教会の最初期に、彼らはエルサレムで活動した組織体 *collegium* であり⁵²、キリストの証人として振る舞い、イエスの名において教えた」と述べている⁵³。

決定したことには」と述べられている点にも留意したい。Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.260-61 参照。Gerhardsson はここに「十分発展した霊的自意識の証拠」を見ている。

48 *Ibid.*, p.221. Gerhardsson は関連個所としてルカ 24:36 以下をも挙げる。さらに *Ibid.*, p.281 でも「パウロにとって使徒とは何よりも『復活の証人』である」と述べている。

49 使徒言行録 1:15-26 参照。

50 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.222.

51 *Ibid.*, pp.243-44 に使徒 6:1 以下から引用されている。さらに、「御言葉への奉仕」を「福音の告知 *Verkündigung des Evangeliums*」(Billerbeck Comm. II. 647) と呼ぶことにに関して、もし *Verkündigung* が現代の釈義と神学における通常の用法である「純粋に宣言する」という意味ならば、それは正しくないと言っている。

52 Rodríguez, op. cit. pp.35-36 は、「イエス伝承を形成し、保存し、伝達する責任を持つ組織ないし権威ある学派を十二弟子が形成していた」と Gerhardsson が論じているのは、テキスト（特に使徒 15 章）への読み込みであると指摘している。一方、Rodríguez の師 Loveday Alexander は、Eve, op. cit. p.41 に拠れば「Gerhardsson が思い描く使徒的組織は有り得そうである」と論じている。

53 これは Theissen が提示する「放浪の霊能者」として伝承を荷った使徒の描写とは相当に異なる。また Gerhardsson, op. cit. (1961), p.244 は、使徒 2:42 「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」を引用しつつ、「彼らの証

また、イエスの弟子たちと初代教会が持っていたであろうイエスの言葉の権威に対する態度に関して、Gerhardsson は次のように述べている⁵⁴。

「歴史的蓋然性は、イエスの弟子たち、そして初期キリスト教全体が、彼らがメシアであると信じた方の言葉に少なくともラビの弟子たちが彼らの師の言葉に与えたのと同等の敬意を与えていたことに有利である。」⁵⁵

4.2.2 パウロの証拠

次にパウロの証拠であるが、Gerhardsson の論述の中では、次の点が重要であると思われる。すなわち、パウロは自ら告げ知らせた福音に関して「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされた」（ガラ1:12）と述べているものの、こと「主のことばと行いについての伝承」に関しては、パウロは、あくまで元来の使徒たちから受け取ったのであり、従ってこの「伝承」は専らエルサレムに由来するという理解がパウロにとっても基本線となるという点である⁵⁶。

この一見すると矛盾するような理解は、Gerhardsson に拠れば、次のように

言は驚くほど教育的性格を持っており、また実際のメシア的出来事と〔旧約〕聖書に基づいている」と述べている。

54 *Ibid.*, p.258.

55 この言葉は Kenneth E. Bailey, “Informal Controlled Oral Tradition and the Synoptic Gospels”, *Asia Journal of Theology* 5/1, 1991, p.37 にも引用されている。また Gerhardsson, op. cit. (2001), p.29 では、イエスの言葉だけでなく行為をも含めて「〔福音書の中でのイエスの独自の権威を鑑みて〕イエスの信従者たちがイエスの教えを保存し、イエスの行為を記憶することに関心がなかった時がかつてあったと想像することは極めて困難になる」と述べている。*Ibid.*, p.61 をも参照。この理解は、Bultmann とは対極である。

56 Gerhardsson, op. cit. (1961) が引用している例えば一コリ 7:12 以下 (pp.312-13)、11:17 以下 (pp.320-22)、15 章 (pp.322-23) からは、パウロがイエス伝承を知り、利用していることを確かにうかがい得よう。さらに *Ibid.*, p.302 n.4 に拠れば、C. H. Dodd はパウロが福音書諸伝承、特にマタイを知っていたと思われることを強調している。Gerhardsson, op. cit. (1961), p.274 が関連個所として挙げているロマ 15:26 以下（その中心は、「異邦人はその人たち（エルサレムの聖なる者たち）の霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります」であるように思われる）、*Ibid.*, p.275 で引用されているガラ 6:6、一コリ 14:36 をも参照。

調停し得る。すなわち、「割礼を受けた人への福音」がペトロに任された一方で、「割礼の無い人への福音」はパウロに任された⁵⁷。このパウロに任された「福音」は、Gerhardssonの論述全体から判断するならば、要するにパウロが「復活したキリストと出会った」経験から知らされたこと、悟らされたことを指すのであろう⁵⁸。この「福音」を、パウロは「復活の証人」として、「人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされた」ものとして語り得たのである⁵⁹。

一方で、元来の使徒たちはパウロとは異なり、単に「復活の証人」であるのみならず、イエスのガリラヤからユダヤに及ぶ働きに同行し、その間の「主のことばと行いと証人」でもある⁶⁰。従って、こと「主のことばと行いについての伝承」に関しては、パウロは、元来の使徒たちから伝承を受け取って利用せざるを得ないのである⁶¹。

57 ガラテヤの信徒への手紙 2:7 参照。Gerhardsson, op. cit. (1961), p.271 は、「両者には共通の基本的内容（一コリ 15:2 以下）はあるものの、二つのいささか異なる使信が生じた」と述べている。ここで両者の違いは、キリストの働きが、割礼を受けた者にとって、あるいは割礼の無い者にとって、それぞれに対してどのような意味があるのかという面から生じる違いであると説明されている。またパウロが「わたしの福音」（ロマ 2:16;16:25）という言い方をする 것도、Gerhardsson は使徒の間で共通の福音よりも、むしろパウロが置かれた特定の文脈での「福音」を指すと解している。すなわち、「異邦人がキリストの働きのお陰で割礼無しにモーセの律法に服従せずに神の民に組み入れられる」という福音である。ただし、Gerhardsson は付言して、「パウロの『律法の枠外（extra-legal）にある異邦人への福音』がエルサレムにいる元来の使徒たちによって認められた」（ガラ 2:2 参照）と述べ、両者の違いが誇張されるべきではないと論じている。

58 ここには回心前から知っていたイエスに関する情報に基づくパウロの判断が、回心体験によって修正されたものも含まれるであろう。例えば、回心前のパウロは神の呪いを十字架の上で受けたイエスを神の子、救い主だと主張するキリスト教徒は神を冒瀆していると判断して迫害した。しかし、回心体験によってパウロは、確かに神の呪いをイエスは受けたが、それは私たちを贖うための貴い犠牲であったと悟った。ガラ 3:13「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました」参照。

59 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.273 参照。

60 *Ibid.*, p.282.

61 パウロが回心後三年を経てエルサレムに上ってペトロと知り合いになろうとしたことも

4.3 初期キリスト教における伝承の伝達過程のまとめ

1. エイレナイオスの言葉に関しては

- 1) 伝承が権威ある語り手と関連付けられている
- 2) エイレナイオスが伝承を暗記したと主張している

2. パピアスの言葉に関しては

「原則として書かれた言葉には、生きて留まり続ける（人間の）声に由来する言葉ほどには頼らない」という態度の故に、パピアスは伝承を書き留めずに、注意深く学んで自分の記憶に刻んだ

3. ルカの証言に関しては

- 1) 使徒言行録の描く使徒像は「キリストの言動、また彼に関すること全て、特に復活についての証言を担った証人」である
- 2) 使徒の活動で最も重要なものの一つは、「福音を宣べ伝えること」よりも「教え、イエス・キリストについて証しすること」である

4. パウロの証拠に関しては

「私の福音」については「人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされた」と語るパウロにとっても、「主のことばと行い」についての伝承に関しては専らエルサレムに由来するという理解が基本線となる

以上の Gerhardsson の分析に従えば、「主のことばと行い」についての伝承は、ルカの証言からもパウロの証拠からもエルサレム教会の使徒たちに由来し、彼らが教え、証しすることによって伝えられたことになる。また、エイレナイオスやパピアスの言葉からも2世紀に至るまで、権威ある語り手によって「主のことばと行い」についての伝承が受け渡され、伝承の受け手はそれを主には記憶したと推定することが許されよう。

(ガラ 1:18)、ペトロから「主のことばと行い」についての伝承を得ることを目的としていたと解し得よう。Ibid., pp.297-98 参照。

4.4 初期キリスト教伝承の起源

初期キリスト教伝承の起源について Gerhardsson は、「初期キリスト教における伝承の伝達過程の分析」の最後に論じており、「キリストの言葉と働きは律法と預言者の成就である」⁶²ということを念頭に置き、その起源は、原始教会の説教でもなく⁶³、イエスでもなく⁶⁴、トーラーのイエスによる解釈にあると解している⁶⁵。すなわち、「律法と預言者」からの流れの中に初期キリスト教伝承の起源を位置付けるのである。ただ一方で、実際上は、Gerhardsson は初期キリスト教伝承の「最初の輪」をイエスと最初の弟子たちの間に見ている⁶⁶。

4.5 初期キリスト教伝承の性質

さて、こうして生み出された初期キリスト教伝承の性質について、次のよう

62 *Ibid.*, p.325.

63 *Ibid.*, p.324 は「初期キリスト教伝承の起源を原始教会の説教で始めることは、歴史的に可能ではない。そのような手順は、非歴史的であり、神学的に疑わしい」と述べている。また、Gerhardsson, op. cit. (1964), p.31 では、『『初めに説教 (*kerygma*) があった』というテーゼは、キリスト教神学の出発点としては素晴らしい。しかし、歴史的陳述としては、それは単純に不正確である」と述べている。この点に関して Gerhardsson, op. cit. (2001), p.41 では、(初期キリスト教の権威者の名を冠した) 新約聖書の書簡には、イエスの言葉の直接の引用が無いことを、自身が「様式史家の断言、すなわち、共観福音書伝承は、初期キリスト教会の一般的な説教、教え、勧告において起こり、保存された」を受け入れることが非常に難しい理由として挙げている。*Ibid.*, p.67 をも参照。また、*Ibid.*, pp.64-65 では、様式史家が「原始キリスト教の一般的な説教、教え、他の活動から福音書記者たちや彼らの先駆者たちが二次的にイエス伝承を濾過した」と解する点について、この仮説の論拠は非常に弱いと指摘している。

64 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.324 は「イエスから始めることも有り得ない」と述べている。

65 *Ibid.*, p.328 には、イエスが弟子たちに教える際に「いくつかの自分の言葉を暗記させたに違いない」と述べている。また、*Ibid.*, p.328 n.4 には「初代教会は理解するよりも良く記憶した」という T. W. Manson, "Review of Joach. Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*," *New Testament Studies* 1, 1954-55, p.129 n.2 の言葉を引用している。一方、Gerhardsson の師である Risenfeld は、Bailey, op. cit. (1991), p.36 に拠れば Harald Risenfeld, "The Gospel Tradition and its Beginnings", in *The Gospel Tradition*, Philadelphia, Fortress Press, 1970, p.22 において、「福音書伝承の始まりは、イエス自身と共にある」と述べている。

66 Gerhardsson, op. cit. (2001), p.36 参照。

に Gerhardsson は述べている⁶⁷。

「含意されていることは、イエスの言葉と働きは、これらの弟子たちの記憶に刻印されたということである。ユダヤ教の弟子たちの彼らの師への態度を思い起こせば、忘却と敬虔な想像 (imagination) が、短い2、30年の経過の中で真正の記憶が見分けが付かないほどに変容することにあまりにも多く関与していると考えることは非現実的である。」

Gerhardsson はさらに、「若い教会においてはイエスに最も近い弟子たちが特別な権威を持っていた」ことや、「使徒の組織体 collegium が紀元40年代にエルサレムになお居を構えており、証拠から判断すれば50年代までもそうであった」ことを指摘している⁶⁸。

こうした指摘は、あたかも Gerhardsson が、初期キリスト教伝承の性質を極端なまでに固定的で変化の無いものだとして想定しているとしばしば解され、批判されている⁶⁹。しかし、Gerhardsson はイエス伝承が全く固定的で、びくとも

67 Gerhardsson, op. cit. (1961), p.329. また Rodríguez, op. cit. p.35 は、「イエスの弟子たちはその教えを記憶に留めることで保存し、記憶された形でその教えを伝達した」という Gerhardsson の言葉を引用した上で、「この認識こそが様式史の遺産からの意義深い進歩である」と評価している。

68 Gerhardsson, op. cit. (1961), pp.329-30. Gerhardsson, op. cit. (2001), p.20 も結婚に関して、パウロが主の言葉と (I コリ 7:10) と自分の意見 (I コリ 7: 25) を明確に区別している点を指して、「初代教会が『主によって by the Lord』語られたことと『主にあって in the Lord』他の誰かによって語られたことの間に何の区別も付けなかったという一般的な見解に対する狼狽させる証拠 (下線は筆者)」だと述べている。*Ibid.*, p.73 をも参照。また *Ibid.*, p.81 では「物語テキストが一つの研究グループ study group において形成される可能性にも触れ、その場合、この集団が社会的制御 social control の道具としても機能する」と指摘している。

69 例えば Rodríguez, op. cit. p.36 は「Gerhardsson の口述によるイエス伝承に関する考えはあまりに固定的で流動性のないものであり、この点が顕著なのは固定化された口述伝承は文書によるイエス伝承よりも安定的で変化しないと彼が想定していることである」と批判する。さらに「確かに Gerhardsson は、初期キリスト教における固定化されたイエス伝承の改変や創造的な適用の余地を残している。しかし Gerhardsson の思い描くイエス伝承は、にもかかわらず理由なく、非実地的に、安定的で、固定化され、記憶されている」と述べている。

しないと考えている訳ではない。例えば、Gerhardsson 自身、「我々の福音書が、イエスの教えと目撃者たちの直接の報告、これらの完全で機械的で変更無し
の記録の写しであると考えerことは妥当ではない」と述べている⁷⁰。また「イエスの言葉がイエスから福音書記者たちへの（伝達過程の）途中で変化したことは明らかである。我々のテキストは記憶違い⁷¹、翻訳の多様性、解釈を伴う改変などを明らかにする」とも述べている⁷²。さらに伝達過程で後に、イエス復活後に生じた問題、考え、観点がイエスの言葉に埋め込まれたことをも Gerhardsson は認めているが、それは限定的であると解している⁷³。

5. Gerhardsson の見解のまとめ

さて、以上概観した Gerhardsson の見解をまとめるならば、次のようにな

-
- 70 Gerhardsson, op. cit. (2001), p.25. また *Ibid.*, p.54 では「ラビ伝承にさえ、時の経過とともに素材が変更されることが見られ、正確な言葉遣いに注意が払われる法規則集にさえ、変化は起こる」と述べている。さらに再び Gerhardsson, op. cit. (2001), p.xi の序文において Donald Hagner も「イエス伝承は解釈、変更、編集、改変などを被って来たことを Gerhardsson が一瞬たりとも決して否定しなかったことに留意することは非常に重要である」と述べている。またボウカム、前掲書、243-244 頁も Gerhardsson の見解について「ある程度の編集を福音伝承のうちにも想定して」いる、と述べている。
- 71 Eve 2013:11 は「古代の普通の人の記憶力が現代人に優るか否かは不確かであるが…自分たちの記憶を我々がしばしばしがちなように文書と照らして確認することができなかったために、我々よりも自分たちの間違いに気が付かなかっただろう」と述べている。
- 72 Gerhardsson, op. cit. (2001), p.79. *Ibid.*, p.71 n.26 では「ラビ文書、対応する初期キリスト教素材、これらにおける多様な型のテキスト変更について（Gerhardsson, op. cit. (1961)、Gerhardsson, op. cit. (1964)において）もっと大いに論じなかったことを後悔している」と述べている。それでも Gerhardsson, op. cit. (1961), p.329 で、「真正の記憶が見分けが付かないほどに変容する」ことに反対していることは、裏を返せば、「ある程度の変容」を前提にしていると解し得よう。従って、確かに「伝承の流動性」について、ラビ的ユダヤ教の伝承に関しては明言しているものの、初期キリスト教の伝承に関しては必ずしも当初から十分に論じ切ったとは言い得ないであろうし、またこれについて明言しているのは後の著作（初出は 1977 年以降）が多いように思われるものの、少なくとも当初から言及はしているのである。
- 73 Gerhardsson, op. cit. (2001), p.79.

るであろう。

1. Gerhardsson は、様式史家によってさえ具体的、歴史的に充分考察されていたとはいえない「技術的観点」からの初期キリスト教における福音書に至る伝承の伝達過程の提示に取り組んだ。
2. ラビ的ユダヤ教における伝承の伝達過程を、次のように分析する。
 - 1) 文書トラーの伝達過程の具体的な場面としては次の三つを挙げ得る。
 - a) テキスト自体の保存を目的に専門家である写本家が注意深く写し取る
 - b) 初歩的指導をする *bet sefer* と呼ばれる学校でテキストを暗記する
 - c) 公の礼拝で聖書を朗読する
 - 2) 口述トラーは、ラビ・アキバに先んじる時代でも、絶え間ない忠実なテキスト反復によって、(必ずしも内容が固定的であるとは限らないものの) 生きた記憶として保持された。簡潔さと短さが重視され、教師によるそれが不十分な時は後の教師や生徒が補った。
 - 3) 口述トラーの選別主体は次のとおりである。
 - a) ことば伝承
…ア) 教師自身、イ) 教師自身の個人的生徒、ウ) のちの時代の教師や生徒
 - b) 物語伝承
…ア) 教師自身 (数としては少ない)、イ) 生徒集団に属する者また、「生徒は自分の教師のことばについての証人であり、その行動の証人である」。また、こうした証言の価値は、ラビにとっては、それらの歴史性に全く依存する。
3. 初期キリスト教における伝承の伝達過程を、次のように分析する。
 - 1) 最初の数十年間、伝承は口述されたが伝承の一部は私的ノートの形で書き留められた。
 - 2) 「主のことばと行い」についての伝承は、エルサレム教会の使徒たちに由来し、彼らが教え、証しすることによって伝えられ、2世紀に至るまで、権威ある語り手により受け渡され、受け手はそれを主には記憶した。

4. 初期キリスト教伝承の起源は、トーラーのイエスによる解釈に求めるべきである。すなわち、「律法と預言者」からの流れの中に初期キリスト教伝承の起源を位置付ける。もっとも実際上は、初期キリスト教伝承の「最初の輪」はイエスと最初の弟子たちの間にある。
5. イエスの言葉と働きは弟子たちの記憶に刻印され、その記憶が短い2、30年の経過の中で見分けが付かないほどに変容するとは考え得ない⁷⁴。
6. イエス伝承は、全く固定的で、びくともしない訳ではなく、福音書も、イエスの教えと目撃者たちの直接の報告の完全で機械的で変更無しの記録の写しではない。
7. 伝承の編集は、伝達過程の最終段階に限定されず、伝承と編集には相互作用がある⁷⁵。

6. Gerhardsson の方法論と見解へのいくつかの指摘

Gerhardsson の方法論とその見解については、次の点を指摘し得よう。

1. ラビ的ユダヤ教における教師と生徒との間の伝承の伝達過程は、学問的、専門的なものであると解する立場からは、これをイエスと弟子たちとの間、あるいは弟子同士の間に適用することにしばしば疑問が呈された⁷⁶。しかし、Gerhardsson 自身は（ラビが技術を洗練させたとはいえ）そこで行われているのは一般向けの教育行為であると反論している⁷⁷。

74 この点に関連して Eve, op. cit. (2014), p.3 は、「語りの何が記憶されるかは多数の諸要因に拠って多様であるが、長い会話やパフォーマンスの全ての言葉を記憶することは有り得そうにない。記憶されるのは、語られたことの要点あるいは語り手の印象、特に驚くべき言い回しである」と述べている。

75 Gerhardsson, op. cit. (1964), p.39.

76 例えば Eve, op. cit. (2014), p.40 は、「ラビの教育法は文書テキストに緊密に結び合わされており、イエスの弟子たちの間で実践されたことない。素材の逐語的暗記は読み書きできる集団でのみ生じる傾向にある」と述べている。*Ibid.*, p.40 n.25 をも参照。

77 Gerhardsson, op. cit. (1964), p.17. また *Ibid.*, p.25 では、たとえ（十二）弟子たちが召

2. Gerhardsson が伝承をあまりにも固定的で、流動性がないものと解しているとしばしば批判されている⁷⁸。しかし既述のとおり（本論45頁）、Gerhardsson の基本的な理解は、伝承の伝達過程に固定性と流動性の両方を認めるものである。すなわち、師である Riesenfeld は「厳格に制御された伝達過程」を想定したのに対して、弟子である Gerhardsson は、流動性をも認めているのである⁷⁹。

ただし、伝承にはある制御が働くことが Gerhardsson の念頭にあることも確かであって、全く自由な流動性を想定してはいないであろう⁸⁰。なお、

命の時には「無学な普通の人」（使徒 4:13）であっても、「生涯の最期においても教育を受けていなかったと見なすことは極めて不可能である。20、40、60 年間、彼ら（十二弟子たち）は教会の働きを導いて来た。説教し、教え、聖書を研究し、教えについての問いについて議論し判断し、戒規を執行し、教会の信仰を守った」と述べている。すなわち、十二弟子たちが教師としての質を高めて行ったに違いないと Gerhardsson は論じるのである。

- 78 Eve, op. cit. (2014), pp.41-42 をも参照。これは一つには Gerhardsson の師である Harald Riesenfeld の見解を Gerhardsson のそれと同一視するという誤解から生じたものであろう。James D.G. Dunn, *The Oral Gospel Tradition*, Grand Rapids, Eerdmans, 2013, p.22 をも参照。James D.G. Dunn, *Christianity in the Making*, vol.1: *Jesus Remembered*, Grand Rapids, Eerdmans, 2003, p.197 に拠れば、Riesenfeld は「ラビ伝承の伝達に使用される術語が、新約聖書の同様の過程に使用されているギリシア語の背後にあることに着目し、初期キリスト教の伝達過程はラビのそれと同様にイエスの言葉と行為の『厳格に制御された伝達』であると推論した」。Gerhardsson, op. cit. (1998), p.xv をも参照。Eve, op. cit. (2014), p.33 は「Dibelius とは異なって、Riesenfeld が指摘するには（Riesenfeld, op. cit. (1970), pp.1-22）伝承を受け渡す際の専門用語が使用されたのは、民話伝承における逸話の『曖昧な拡散』を指してではなく、素材の固定化された内容の（教師が確認したものをその弟子が記憶するという）極めて制御された受け渡しを指してであった」と述べている。
- 79 Dunn, op. cit.(2013), pp.215-216 は、Gerhardsson のモデルが認めている多様性への考慮がDunn 自身足りなかったと認めている。これはDunn, op. cit. (2003), p.198 の「Riesenfeld と Gerhardsson の主張は福音書記者たちの使用する同一伝承の間の明瞭な不均衡を十分説明できるものよりも遙かに硬直して固定的な伝承を思い描いているように思われる」という指摘を念頭に置いているように思われる。
- 80 制御を働かせる主体としては、註 68 に拠れば「研究グループ」が挙げられており、また「（使徒の）組織体 collegium」については必ずしも明示的では無いものの、Gerhardsson のイメージの中に十分含まれていると思われる。Eve, op. cit. (2014), p.45 も Gerhardsson

実際この「制御」がどれほど Gerhardsson が思い描くように機能し得たのかという点については、原始教会の発展の速度の解釈にもよるであろう⁸¹。

3. Gerhardsson が物語伝承を考慮していないという批判もあるが⁸²、当を得ているとは言い得ない⁸³。しかし、例えばイエスと最初の弟子たちとの間に伝承の「最初の輪」を見ていることは⁸⁴、Gerhardsson の論考の中で、確かに「物語伝承」も考慮しているものの、やはり「ことば伝承」の方により重点が置かれていると解す論拠の一つとは成り得よう⁸⁵。

7. おわりに

今まで見て来たように、Gerhardsson はそれまで未着手法領域であった初期キリスト教伝承の伝達過程の技術的観点からの解明に取り組んだ。確かにあま

に関する評価のまとめの中で、「12 弟子がイエスの死後 1, 2 年以内にいかなる機能も止めてしまったり、あるいはある人々が伝承に対して他の人々よりもより制御を働かせることが無かったならば、本当に奇妙なことである」と述べている。

- 81 興味深いことに、Gerhardsson 自身は、論拠は不明ながら、Gerhardsson, op. cit. (2001), p.40 において「新約聖書時代には、教会は、地域的な広がりにおいても、数の多さにおいても、我々が通常考えるものには程遠かった」と述べている。この見解とは逆に、もし（広がりにおいても数においても）急速に教会が発展したと見るならば、早晩、人材不足により伝承の全体的制御は機能しなくなったことであろう。Eve, op. cit.(2014), p.40 は、この説を採る一人として E. P. Sanders の名を挙げている。E. P. Sanders, *The Tendencies of the Synoptic Tradition*, SNTSMS 9, Cambridge, Cambridge University Press, 1969, p.294 参照。
- 82 Dunn, op. cit. (2013), p.222 n.36 は「Gerhardsson が福音伝承の多くが物語であることを無視している」と述べている。
- 83 Birger Gerhardsson, “The Secret of the Transmission of the Unwritten Jesus Tradition”, *New Testament Studies* 51, 2005, p.66 は、「ハラカー（論者註：ユダヤ法の条文）が逐語的暗記によって伝達されるのに対して、ハッガーダー（論者註：物語形式）は類似の仕方では伝達され得るものの、あまり文字通りにでなく伝達されることもある」と指摘し、その上で、「福音書伝承は主にハッガーダー的である」と述べている。
- 84 本論 58 頁の「まとめ」の 4 項目目参照。
- 85 「物語伝承」の多くは（イエス自身の体験の独白を除き）、当然ながらイエスではなく弟子を中心とする目撃者が伝承の起点となるからである。

りに教師と弟子との間の暗記を中心とした受け渡しに焦点を当てていて、他の伝達過程が考慮されていないと指摘することも可能ではあろう⁸⁶。

しかし、Gerhardsson の弟子である Byrskog による「Gerhardsson は初期キリスト教に存在した伝承を保存し推敲する他の形を決して否定しておらず、暗記を含む面に故意に焦点を合わせた」という指摘を踏まえるならば⁸⁷、Gerhardsson は、初期キリスト教伝承の唯一の伝達過程を排他的に提示したというよりも、むしろ、複数存在したであろう伝承過程の一つを、ただし単なる一つでなく、極めて重要な一つを、今までにないアプローチによって集中的に提示したと言い得るであろう。すなわち、Gerhardsson は、使徒たちを中心とする言わば「(匿名でない) 顔の見える伝達過程」を具体的、歴史的なものとして提示したのであり、その取り組みは大いに評価されるべきであろう。

ただし、初期キリスト教伝承の伝達過程の全体像の解明には、他に存在したであろう伝達過程のイメージとそれらが福音書に至る道筋について、また、それらと Gerhardsson が提示した使徒たちを中心とした伝達過程との関係について、さらなる探求が求められるであろう⁸⁸。

86 Eve, op. cit. (2014), p.45 は、原始キリスト教が、イエスが活動したガリラヤ、十二弟子が集まったと Gerhardsson が考えるエルサレム、パウロの活動先の中心である異邦人都市で、それぞれ異なる形を確かに取っただろうと述べている。

87 Samuel Byrskog, "A New Perspective on the Jesus Tradition: Reflection on James D.G. Dunn's *Jesus Remembered*", In *Memories of Jesus: A Critical Appraisal of James D.G. Dunn's Jesus Remembered* (ed. Robert B. Stewart and Gary R. Habermas), Nashville, B&H Publishing, 2010, p.61 n.6. またボウカム、前掲書、243-244 頁も Gerhardsson の見解について「のちにより柔軟になり、十二弟子以外の流れを汲む福音伝承の存在を認めるようになった」、と述べている。このボウカムの指摘は、直前に引用した Byrskog の見解とは相違があるように思われる。

88 ボウカム、前掲書、88 頁は、Gerhardsson に関して「他の目撃者証言を軽視して十二弟子の権威にのみ注目する方法論には偏りがあるように思われる」と述べている。